

# 令和7年度 天草市外国語科アンケート 集計結果報告

令和8年3月6日

天草市教育委員会

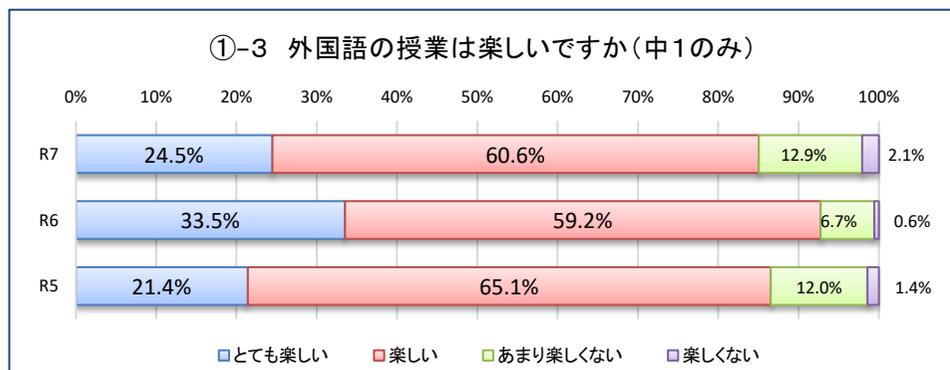
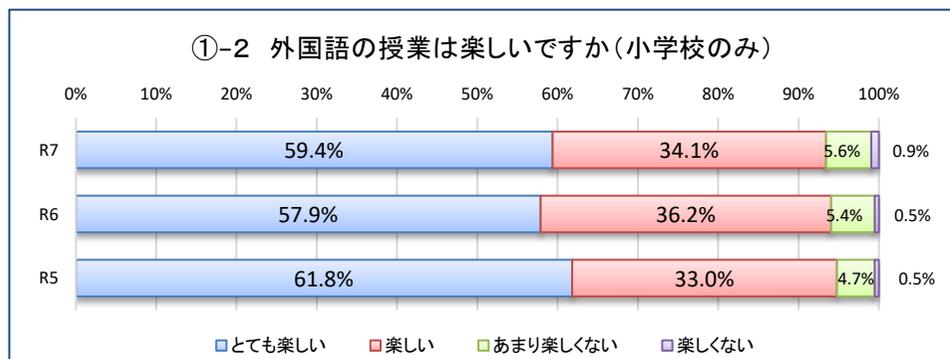
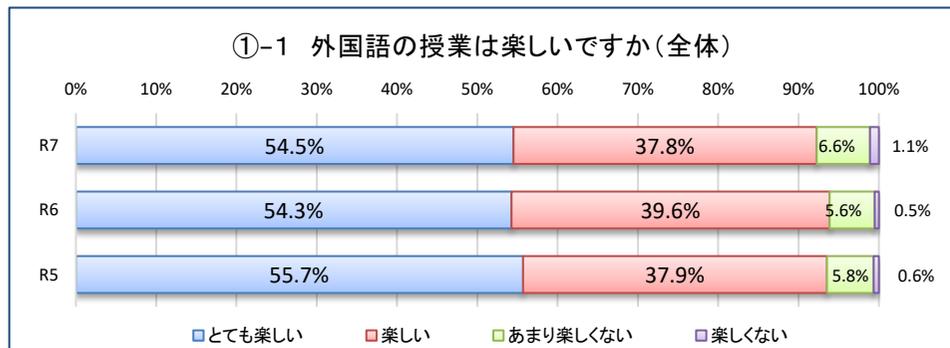
- 1 目的 天草市の小・中学校における外国語科の状況を把握し、今後の天草市の外国語教育推進の資料とするため
- 2 期間 令和7年11月18日～12月15日
- 3 対象 天草市内小学校1年生～6年生及び天草市内中学校1年生（計3453人）
- 4 その他 (1) 小学校においては、教育課程特例校の指定を受けているため、本年度の各校の調査結果について学校ホームページでの公表をお願いします。  
(2) 本結果については、各校において職員間で情報共有をお願いします。  
(復講、回覧等)

～ Sakitsu Village in Amakusa ～

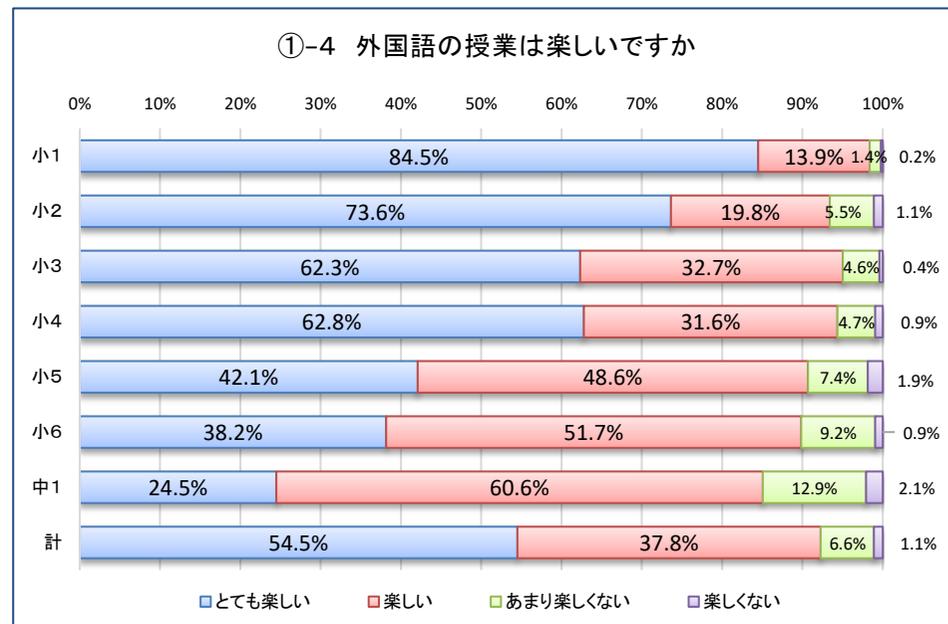


# ① 外国語の授業は楽しいですか

## 【経年変化】



## 【学年別】

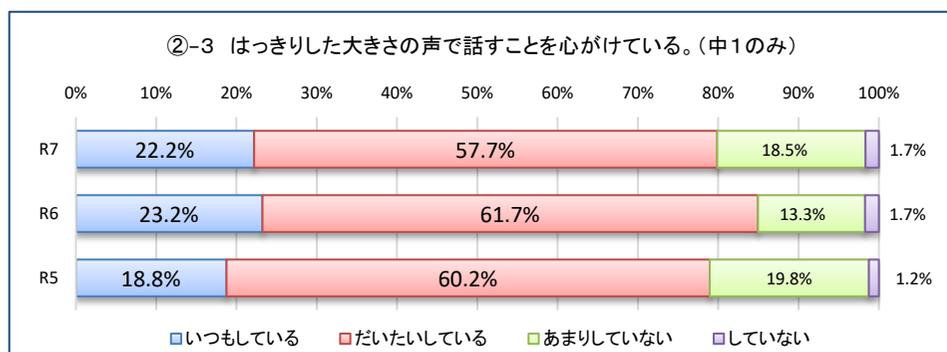
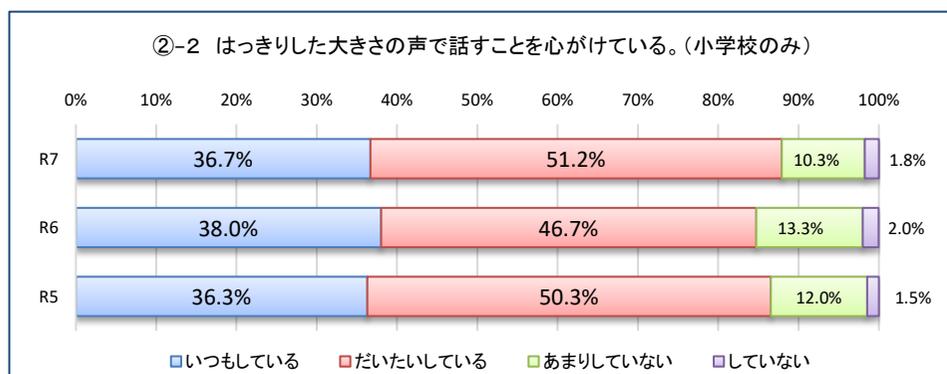
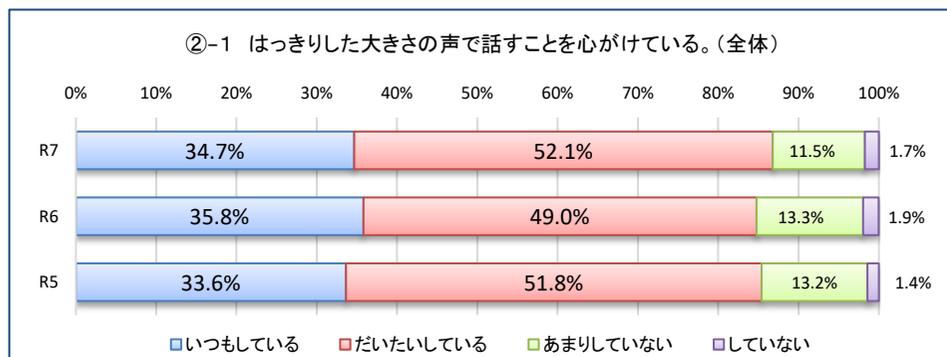


①-1 から、**92.3%**の児童生徒が「楽しい」と回答している。昨年度の**93.9%**と比較すると、全体としては高い水準を維持しつつも、わずかに微減した結果となった。①-4 の学年別データを見ると、昨年度同様、学年が上がるにつれて「とても楽しい」と回答する割合が低くなる傾向が見られる。特に「楽しくないと回答した児童生徒は、小5で約9%、小6で約10%と学年を追うごとに微増し、中1では15%に達している。①-2 から、小学校全体としては依然として高い肯定感を維持しているが、①-3 の中1単体で見ると「楽しい」と感じる生徒の割合が**85%**にとどまっている。

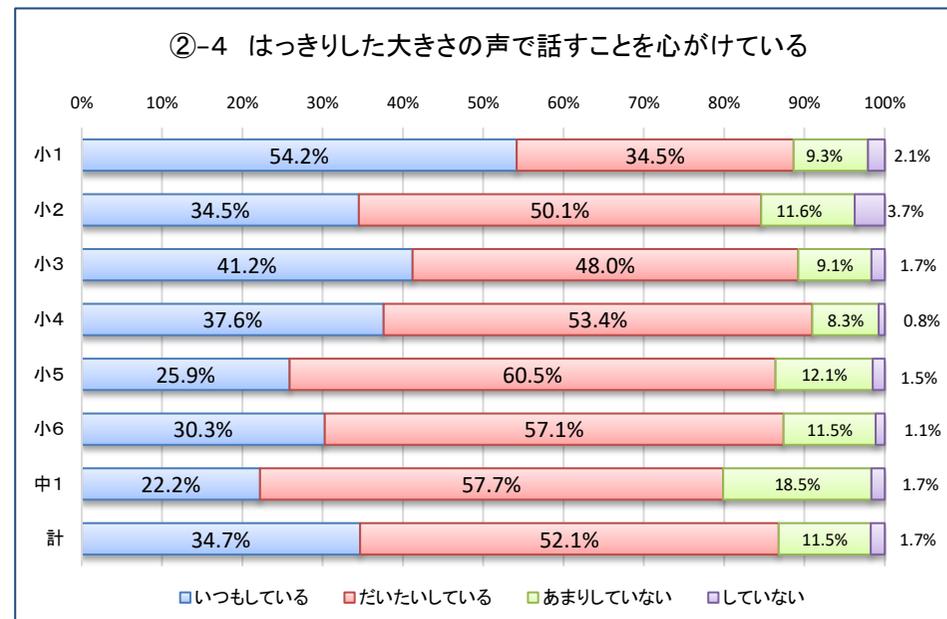
これらの結果から、小学校高学年から中学校1年生にかけての「中1ギャップ」の影響が依然として課題として浮き彫りになっている。特に中1における「とても楽しい」の急激な下落を食い止めるため、これまで以上に小中連携を深め、学びの連続性を大切に**した授業改善**および、生徒の興味・関心に寄り添った指導の工夫を継続して取り組む必要がある。

## ② はっきりした大きさの声で話すことを心がけていますか

### 【経年変化】



## 【学年別】

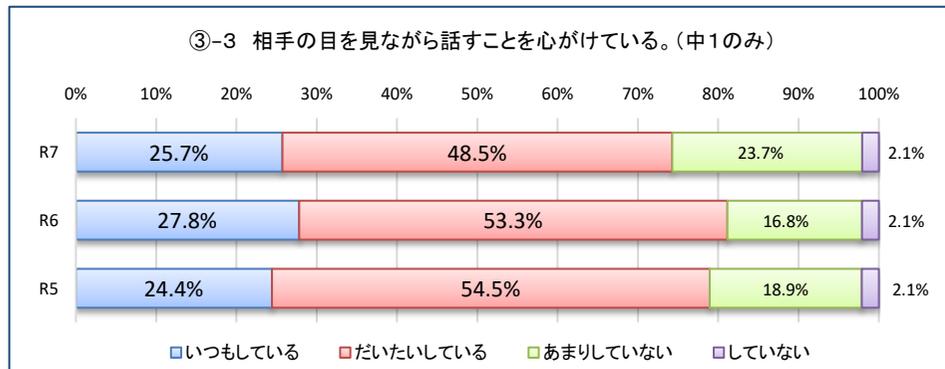
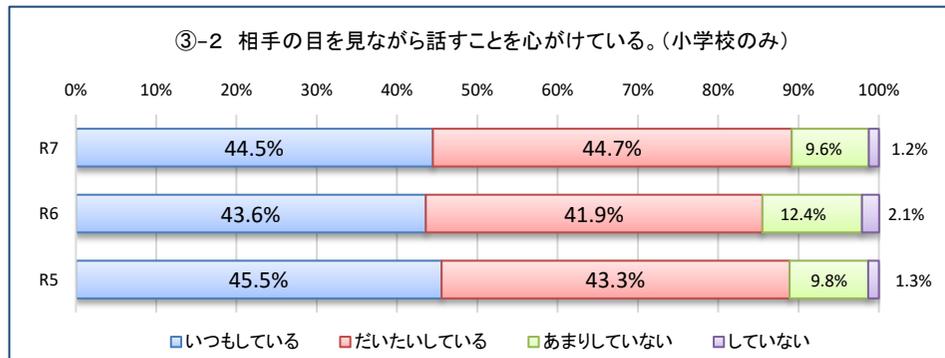
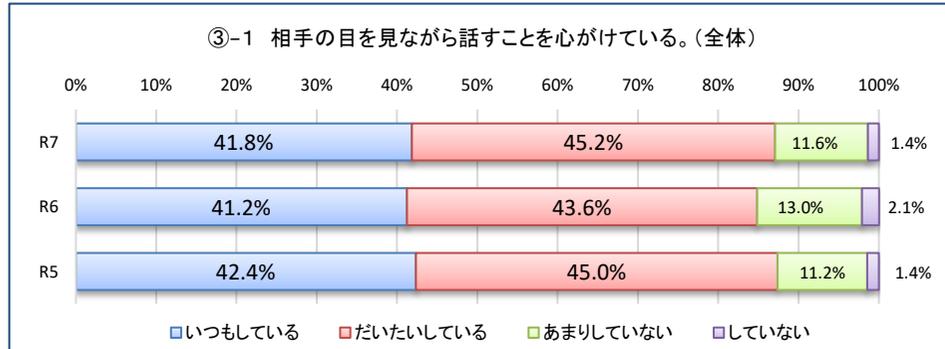


外国語科4つのポイントの一つ「クリアボイス」に関する項目である。②-1から、全体としては**87.8%**の児童生徒が「はっきりした大きさの声で話すこと」を意識していることが分かる。肯定的な回答をする児童生徒は、昨年度の約85%からさらに向上しており、増加傾向にある。これは、相手意識を持たせる声かけや活動の工夫、的確な評価（褒めること）、そして中間指導等を通してクラス全体で共有する機会を設定してきた成果と言える。一方で、②-4の学年別結果によると依然として学年差が見られる。肯定的な回答は、**小5で86.4%**、**小6で87.4%**となっているが、**中1では79.9%**まで低下している。特に中1においては、約20%の生徒が「あまりしていない」「していない」と回答している現状がある。

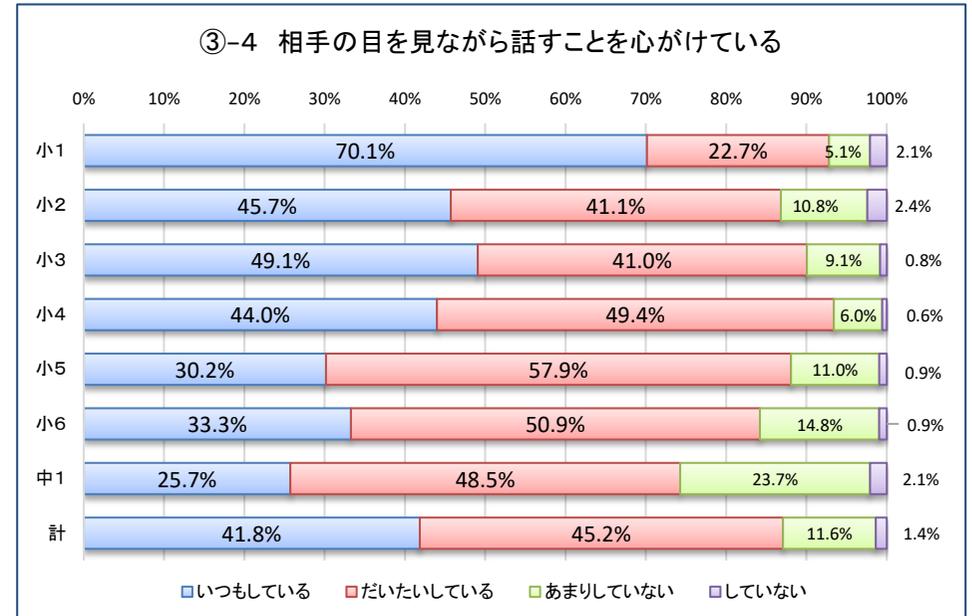
相手を意識した声の大きさや伝え方は、外国語に限らず日常生活の中でコミュニケーションを行う上で大切な要素である。特に中学校進学タイミングでの意識の低下を防ぐため、他教科や様々な教育活動においても「相手に届く声」を意識できるよう、学校全体で継続的に取り組むことが必要である。

### ③ 相手の目を見ながら話すことを心がけていますか。

#### 【経年変化】



#### 【学年別】

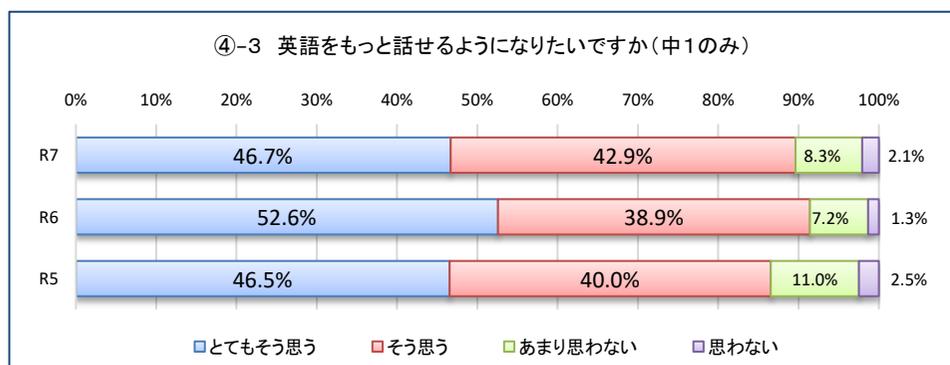
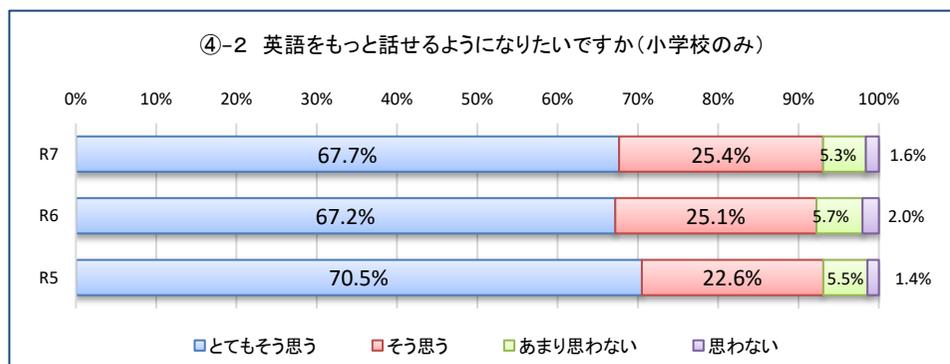
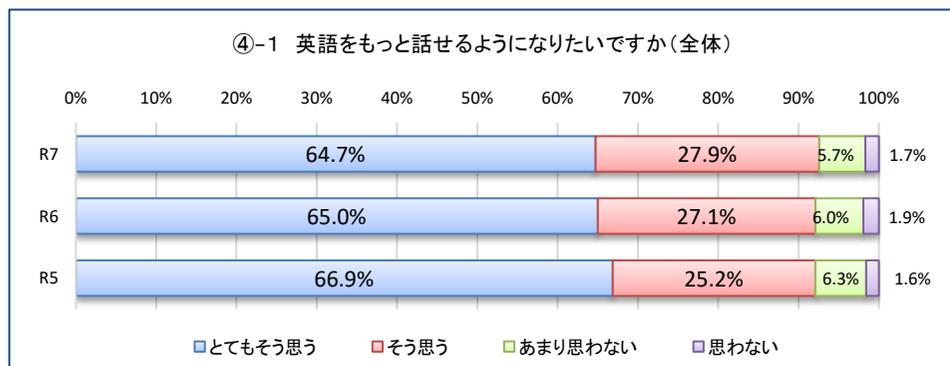


外国語科 4 つのポイントの一つ「アイコンタクト」に関する項目である。③-1 から、全体としては **87%** の児童生徒が相手の目を見て話すことを意識していることが分かる。昨年度の 84.8% と比較すると増加傾向にあり、高い水準を維持している。③-2 及び③-3 から、小学校においては肯定的な回答が約 **89%** と非常に高い。一方で、中 1 単体で見ると、意識している生徒は **74.2%** にとどまっている。③-4 から、学年別に比較すると、小 5 が約 **88%**、小 6 が約 **84%** と小学校段階では高い数値を示している。しかし、中 1 では約 **26%** の生徒が「あまりしていない」「していない」と回答しており、中 1 における「アイコンタクト」への意識低下が顕著である。

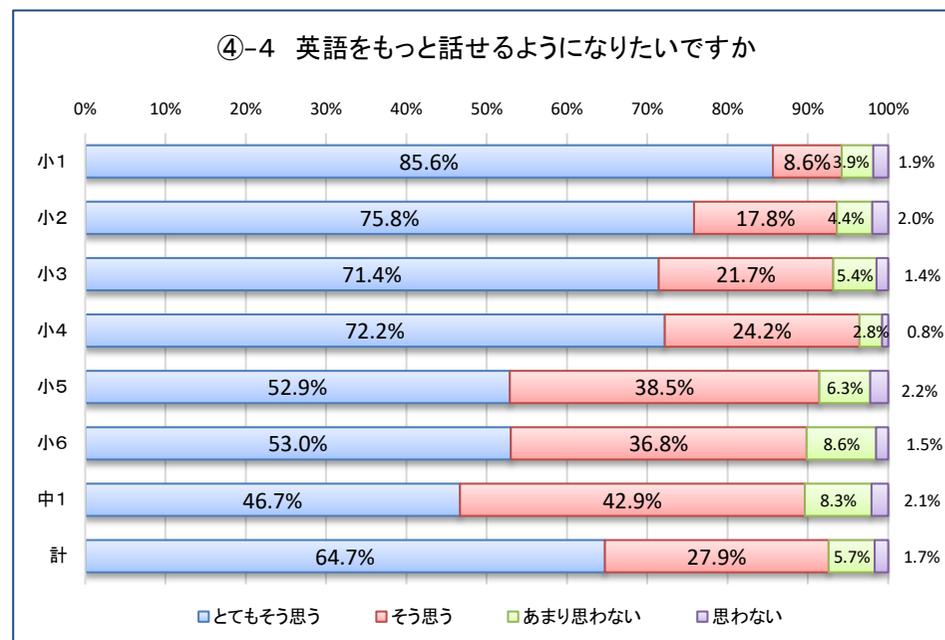
教室において安心して話せる支持的風土の醸成を基盤に、「相手意識」や「目的意識」をもち、「ほんもの」の「コミュニケーションの楽しさや意義」が感じられる言語活動設定の工夫も大切である。特に小学校から中学校への接続期において、対人意識を維持・向上させるための指導の工夫が求められる。

#### ④ 英語をもっと話せるようになりたいですか。

##### 【経年変化】



#### 【学年別】

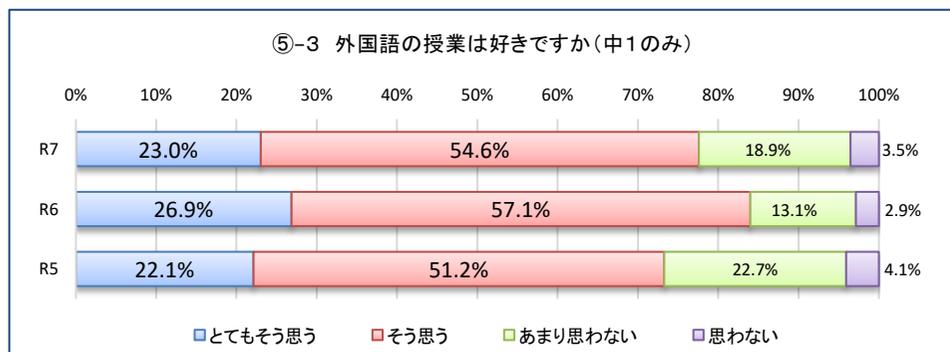
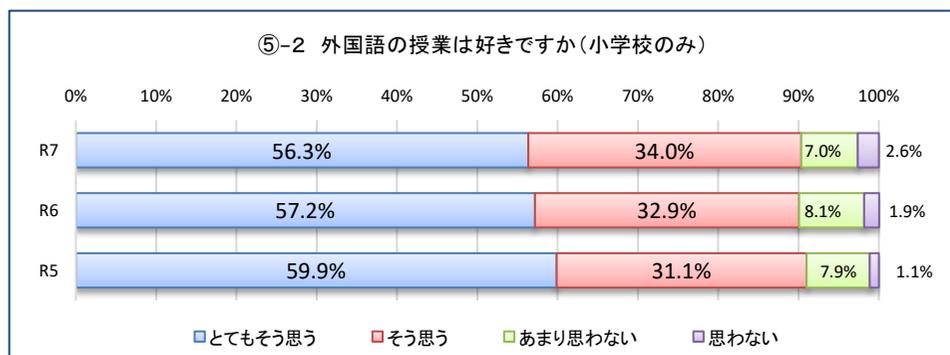
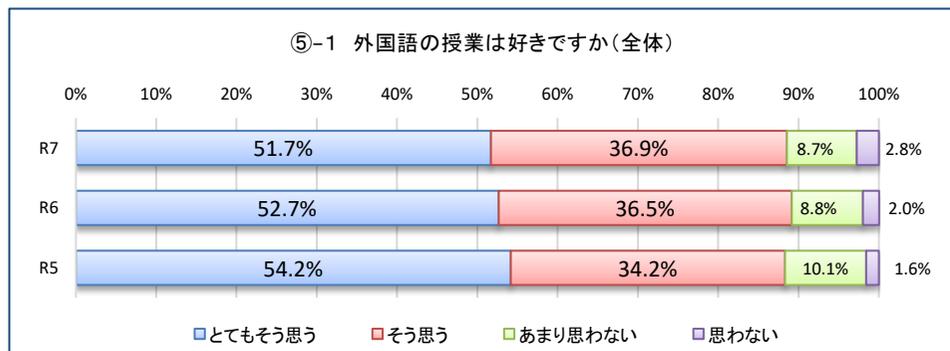


④-1 から、「もっと話せるようになりたい」と思う児童生徒は **92.6%**に達している。昨年度の推移を受け、今年度も高い意欲を維持していることが分かる。④-2 から、小学校においては意欲が非常に高く、**93.1%**の児童が「もっと話せるようになりたい」と回答している。一方、④-3 の中1においては、肯定的な回答が **89.6%**となっており、小学校と比較すると「とてもそう思う」の割合が 20 ポイント以上低い。中1における目的意識の低下を防ぐため、ALT との連携を深め、より「英語を使って話したい」と思える必然性のある言語活動の設定が必要である。

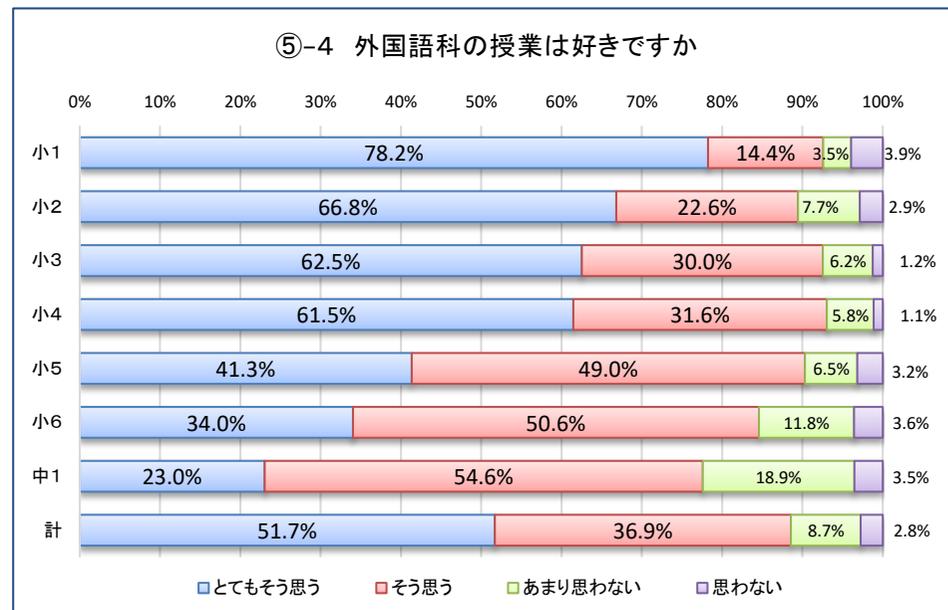
多くの児童生徒が英語に対し高い意欲を示しており、この意欲を持続できるよう授業の充実を図ることが重要である。英語が世界と自分をつなぎ、人と人との繋がりを強固にするツールであることを実感させる指導が求められる。将来のグローバル化を見据え、実際に英語を話すことの喜びを味わわせる活動を継続していきたい。

## ⑤ 外国語の授業は好きですか。

### 【経年変化】



## 【学年別】

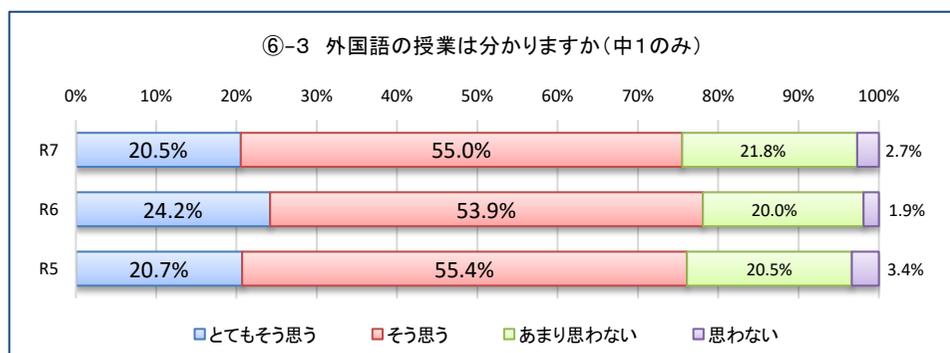
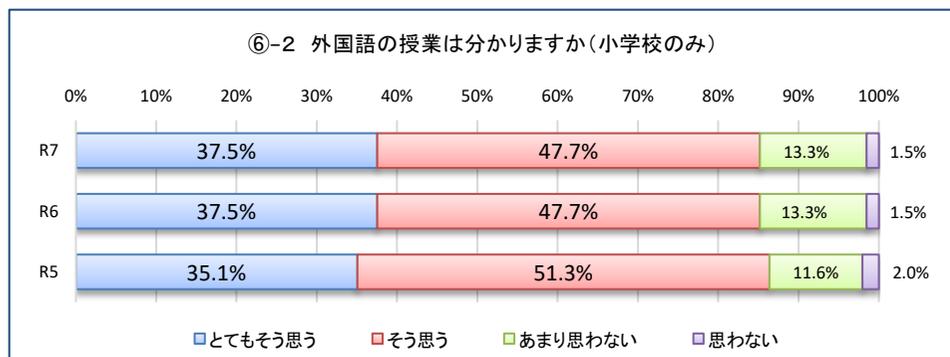
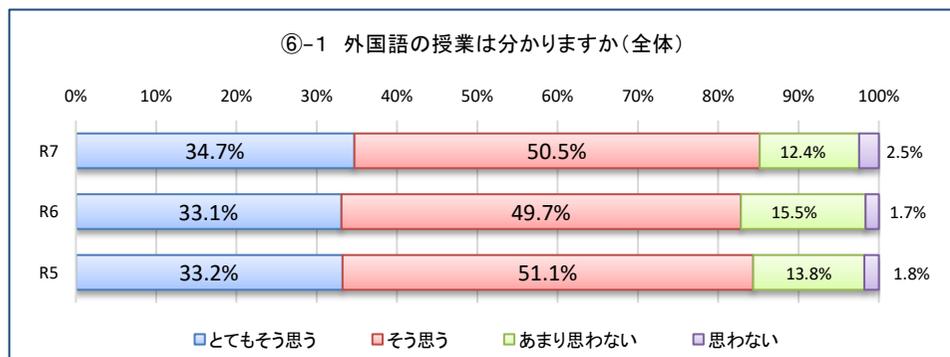


⑤-1 から、「外国語の授業が好き」と回答した児童生徒は **88.6%**であり、高い水準にある。昨年度と比較するとわずかに減少したものの、多くの児童生徒が肯定的な感情を持っている。⑤-2 から、小学校において「好き」と回答した児童は **90.3%**であった。R5 から 90%を超えた勢いを維持しており、小学校段階での外国語教育への親しみやすさが定着していることが伺える。⑤-4 から学年別に見ると、小6 は **84.6%**と高い数値を維持している。一方で、中1 は昨年度の 84%からさらに減少し、今年は **77.6%**となった。約 35%の生徒が「あまり好きではない」「好きではない」と回答しており、中1における意欲低下への対策が急務である。

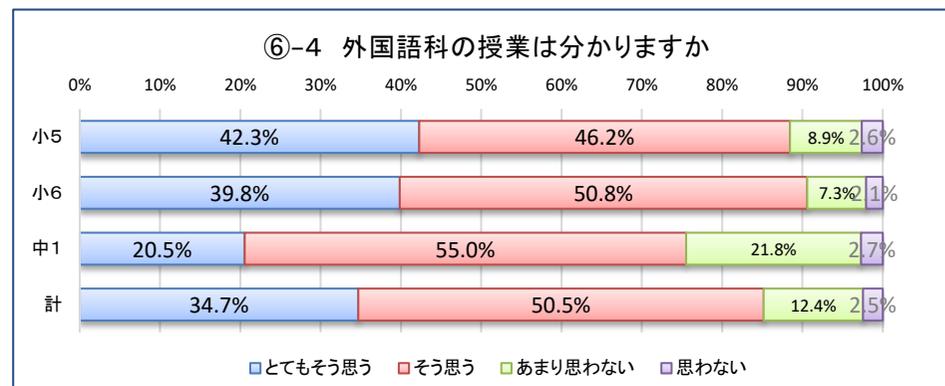
授業が「好き」という意識を高めるには、児童生徒が「コミュニケーションの楽しさや意義」を実感できるとともに、「わかる」「できる」を実感できる授業実践が必要である。特に中学校においては、生徒が必要性を自覚して取り組める工夫が肝要である。さらに、毎時間の学習内容の定着を確かめ、振り返りを通して自身の成長を実感させる指導を強化していく必要がある。

## ⑥ 外国語の授業は分かりますか。

### 【経年変化】



## 【学年別】



⑥-1の全体結果から、**85.2%**の児童生徒が授業の内容を「分かる」と回答している。昨年度の82.8%から向上しており、理解度は改善傾向にあると言える。一方で、約15%の児童生徒は依然として「分からない」と回答している。⑥-2から、小学校において「分かる」と回答している児童は**85.2%**に達している。昨年度に引き続き、小学校段階での理解度は高い水準で推移しており、着実な指導の成果が伺える。⑥-3から、中学1年生において「分かる」と回答している生徒は**75.5%**であった。昨年度一時的に改善の兆しが見えたが今年度は再び低下し、約4人に一人が「分からない」と感じている。

「分かる」を実感させるためには、端末を単なる提示資料としてではなく「個別のつまずきを解消するツール」「表現の幅を広げるツール」として再定義する必要がある。例えば、一斉指導の中で取り残されがちな「分からない」層に対し、AIドリルや音声付きデジタル教科書を活用し、自分のペースで音読や語彙の確認ができる時間を授業内に確保したり、パフォーマンステストやライティングの際、録音機能や添削ツールを活用し、教師やAIから即座にフィードバックを受けることで、「できた」という実感を蓄積させるなど、「個別の学び」を支えるアクティブな支援や、中1で「分からない」が増える要因の一つである「綴り（スペリング）」の負担を軽減するため、最初はタイピングや音声入力を活用し、「伝えたい内容」を形にする喜びを優先させるなどの工夫をさらに推進していくことが必要である。

